

雑誌『奄美』の1920年代

—奄美研究への可能性と「社会評論」に注目して—

一橋大学大学院博士後期課程 白松大史

1. はじめに

日本本土・沖縄の中間に位置する奄美地域（以下、奄美と記す）は、本土文化・琉球文化の影響を受けながら独自の奄美文化を生み出してきた。こうした文化的独自性は、日本文化を見るための重要な視座を提供するものとして、民俗学をはじめとする様々な学術研究の俎上に載せられてきた。

さまざまな分野で進む奄美研究は、歴史研究上1つの問題を抱えている。それは、史資料の発掘・保存の問題である。確かに、研究が進められるにつれ史資料の発掘・保存は行われるようになってきている¹⁾。しかし、それは中世や近世、あるいは米軍統治時代（1946年～53年）に関するものが大半を占め、近代史に関する史資料の発掘・保存状況は決して良いとはいえない状況にある。

こうした状況にあって、1925年に創刊された雑誌『奄美大島』（1927年に『奄美』と改題、以下『奄美』と記す）は、1991年まで60年余りの間刊行され続け、1981年には『奄美大島縮刷版』が発行された。史資料保存という観点から言って、『奄美』の存在は奄美近代史研究上貴重だといえよう。

『奄美』はこれまで、どのような特徴を持つものか、その位置づけが十分になされてこなかった。例えば『改訂名瀬市誌』（改訂名瀬市誌編纂委員会編、1996年）では、1925年に『奄美』が創刊された旨言及がされているものの、具体的にどのような特徴を持った雑誌であるかといった位置づけはされていない。

こうしたなか、中西雄二²⁾は、奄美から日本本土への移動に伴い形成された同郷者集団の成り立ちを追うべく、『奄美』を「同郷者メディア」と位置づけ、『奄美』に記載された同郷者集団に関する記事内容に注目した。その上で中西は、特に1944年までに刊行された『奄美』について、同郷団体

や奄美に住む人々相互の情報交換の場として、あるいは同郷者エリートたちの意見を発する世論先導の場としての機能が『奄美』にあることを指摘した。中西の研究は、「同郷者メディア」という観点からではあれ、『奄美』の特徴を総論的に位置づけようとした嚆矢として評価できる。

本稿では、中西の整理を踏まえつつも、同郷者集団形成、あるいは「同郷者メディア」という観点に限らない『奄美』の特徴づけを試みたい。換言すれば、近代史に関する史資料の現存状況が十分でない状況にあって、ひろく奄美を研究する際に『奄美』がどのような可能性を持つものか、という点から『奄美』の特徴を浮かびあげることが本稿の目的とする。その際、「社会評論」（以下「」をはずす）なる視点を導入して位置づけを試みたい。ここでいう社会評論とは、「ある社会状況を問題として執筆者がつかみ出し、それに対する執筆者の評価・意見等を記したものと定義する。社会評論では、その定義から分かるように「執筆者が何を論じたか」とともに「執筆者が何を問題として論じたのか」に重点をおいている。執筆者のつかまえた問題と評論内容は、執筆者の主観とともに社会状況に依存するものであり、当時の社会状況を知る重要な手がかりになりうると考えられる。

本稿では、『奄美』の創刊目的、出版時の試行錯誤、あるいは創刊当時の状況を踏まえることが『奄美』の特徴を検討する上で重要だと考え、創刊間もない1920年代に限定して『奄美』の特徴を検討することにしたい。

なお本稿では『奄美大島縮刷版』を主に用いた。この『縮刷版』には創刊号から193312³⁾まで収録されており、一部頁の欠落がある。本稿では、頁欠落がある場合には*印にてそれを示す（例えば「192709*」のように）。加えて、1920年代に限っては、192611、192704、192811が『縮刷版』に掲載されていない。

2. 『奄美』創刊の目的と背景

『奄美』は1925年11月、鹿児島市の奄美大島社（創立は1924年、1927年の『奄美』改題に合わせて奄美社と社名変更、以下、奄美社と記す）から創刊された。社主は、当時鹿児島朝日新聞記者であった武山宮信⁹¹で、設立当初は武山の個人経営によるものだった。

創刊号192511には『奄美』創刊目的が記されている。それによれば、「わが郷土大島のことと本土在住同胞の消息を伝えようといふこと」、「奄美の諸問題に関し郷土の諸者及関係者の意見を発表し併せてその動態を伝えること、そして「大島の真相はまだよく知られてゐない、鹿児島さへも大島がよく了解されてゐないため不利の立場におかれることが往々ある、そこで本誌は鹿児島の人にも広く読んで貰ひ、よく大島を知らせる」ことが、『奄美』創刊の目的だという。

表1 鹿児島県旧大島郡の人口推移（『鹿児島県統計書』各年度より筆者作成）【単位：人】

	本籍人口(a)	現住人口(b)	(b)-(a)
1912年	204,517	202,093	-2,424
1915年	213,478	210,814	-2,464
1918年	224,800	220,353	-4,447
1921年	234,654	224,001	-10,653
1924年	248,783	226,200	-22,583

翻って、『奄美』が創刊された1920年代は、奄美地域外への移動が活発になる時期として位置づけられる⁹²。表1によれば、奄美を含む旧大島郡⁹³からは、1920年代に多数の人々が域外に転出していることが分かる。このような移動の背景には、日本本土との定期航路の開設により移動がし易くなったこと、あるいは奄美の社会的経済的疲弊による出稼ぎ者の増加といった要因があると考えられる⁹⁴。こうしたことを踏まえると、「本土在住同胞の消息」を伝えることによって奄美に住む人々と域外に居住する人々をつなぎ、奄美が抱える諸問題に関する意見等を誌上で発表できるようにしたことは、ある種の必然だったといえる。また、表1に見られるような急速な域外移動の状況下で

「大島を知らせる」ことは、鹿児島県内部だけを対象としているだけではなく、広く日本各地を対象としていたと見ることができよう⁹⁵。

3. 『奄美』の誌面構成と編集方針

(1) 雑誌と新聞の中間媒体として

ところで、『奄美』は雑誌形態にて発行されていたのだが、その背景には創刊当時の奄美地域における新聞・雑誌の刊行状況があると考えられる。内務省警保局による『新聞雑誌社特秘調査』（1927年）および『改訂名瀬市誌』（前掲）によれば、『奄美』が創刊された1925年当時、奄美地域には「大島新報」「南島時報」「大島朝日新聞」の3紙が発行されていた一方で、雑誌は1925年に『奄美大島』（社主・文英吉、『奄美』とは別）が創刊されていたという（この雑誌の詳細は不明）。こうした状況もあつてか、「郡内（大島郡内；引用者注）には立派な新聞はあるが、他に雑誌の一つをぜひ欲しいとは私（武山宮信のこと；引用者注）が年来の希望であつた」と、雑誌を発行するに至った理由が語られている。

ただ、『奄美』を“雑誌”であつたと単に見ることは早計である。というのも、単純に雑誌を発行していたわけではなく、雑誌という形態をとりながら新聞としての色合いも出そうとする意図を読み取ることができるからだ。例えば、192801は1920年代に発行された『奄美』で唯一目次が付けられたもので、冊子の大きさは従来の「四六二倍版」から「菊判」に変更された。しかし、続く192802では冊子の大きさは「四六二倍版」に戻され、「編集も以前どおり新聞と雑誌の中間を行くといふ方針をつづけたい」と記されていた。

このように、『奄美』は雑誌という出版形態をもちながら、単なる雑誌としてではなく、「新聞と雑誌の中間」という位置づけがなされていた媒体物であつたということがいえるのである。

(2) 誌面構成

「新聞と雑誌の中間」なる位置づけだった『奄美』の誌面構成は、各号全く同じ構成というわけではなく、号によって誌面はまちまちに構成されていた。ただ、各号に共通する内容はあり、「巻頭

言「青眼白眼」などの社説、「(郡) 同胞消息」なる消息欄、「卷末に」なる編集後記などがあった。あるいは「奄美時報」「郷土近事」といった時事欄(192804*~)、「一樹の蔭」なる読者投稿欄(192610~)等も挙げられる。

こうした構成には、投稿欄・編集後記といった雑誌の特徴と、社説欄・時事欄といった新聞の特徴をみることができる。「新聞と雑誌の中間」という『奄美』の独自の性格を反映した誌面構成であるといえるだろう。

(3) 編集方針

編集方針について、編集後記「卷末に」から読み取ってみることにしたい。

当初、「材料を精選する、郷土に関係のある材料のみ掲げたい、紙数の少いかわり、無駄のない文字で満たしたいと心がけてある」(192601「卷末に」)と、紙幅の都合上郷土関連の記事のみを掲載しようとしていた。さらに「郷土の豊かさ」を掲載記事に求め、「それで本社として最も歓迎し、最も力を尽してあるのも、その方面の材料です、各地奄美会及奄美出身消息、同写真、郷土の風光写真及絵画、郷土の時事、文芸、学術研究、郡人の事業紹介、郡関係評論等については各地社友諸氏の御投稿を切に希望致します」(192807*「卷末に」)と書いている。

ところが、「郷土の関係なきも社友独特の研究になれる述作は歓迎する」と、奄美に関連しないような記事についても投稿を募集するようになる。先に引用した192807*「卷末に」には、「郷土雑誌には不向きだ」としながらも、「紙面の許す限りにおいて郡に関係なくとも、社有独特の研究、取材は歓迎いたします」と記されるようになる。

このように、『奄美』の編集方針は、「郷土色の豊かさ」を重視しながら、紙幅が許せば奄美に関連しないような記事等も掲載することを認めていた。換言するならば、同郷者たちの消息や近況報告、奄美の現況、あるいは奄美社会に限らず社会に対する意見や批評などに関する内容等を掲載しようとしていた。奄美に関連しないような記事等を掲載することは、『奄美』の刊行目的とかみ合わない。おそらく『奄美』の刊行意図とは異なった投稿等が増加したことによって、何かしらのズレ

が生じたのだろう。このズレが何に起因するのか、それを検討するだけの史資料が無いため詳述することは控えるが、少なくとも奄美社・武山宮信と読者との間に『奄美』の掲載記事の内容(奄美に関するものだけか否か)を巡るズレがあったことをみることはできよう⁹⁾。このズレについては、稿を改めて論じたい。

4. 『奄美』掲載記事の特徴

(1) 3つの分類

次に、『奄美』に掲載された記事内容の特徴についてみていくことにしたい。ここでは、記事内容の特徴をみる前段としての記事分類の手順について記すことにする。

筆者は3にて、『奄美』の編集方針について検討を行った。そこでは、同郷者たちの消息や近況報告、奄美の現況、あるいは奄美社会に限らず社会に対する意見や批評などを掲載しようとしていたことに触れた。加えて、『奄美』には決まった誌面構成があったわけではなかったことにも触れた。そこで本稿では、『奄美』掲載記事の特徴をみる前段として、これら編集意図と誌面の特徴をもとに、以下の3つの分類コードを設定して記事の分類を行った。具体的には、掲載記事の内容に沿って、各記事に以下の3つのコードを付して分類を行った。なお、付すコードは1記事に1つとし、複数のコードが付される可能性を持った記事については、より多くの分量が割かれている内容を示すコードを付すこととした。

第1に「消息・近況報告」である。これは、同郷者たちの消息や近況報告、あるいは奄美の現況に関する情報を包含する区分である。

第2に「社会評論」である。社会評論の定義については1にて記したとおりであり、奄美に限らず社会に対する意見や批評などを包含する区分である。

第3に「その他」である。「消息・近況報告」「社会評論」に含まれない内容は「その他」に分類した。「その他」には、詩歌や随想、旅行記、あるいは『奄美』への賛辞・意見等が含まれる。また、1927年9月に昭和天皇が奄美大島に行幸した際に掲載された行幸関連記事なども「その他」に含め

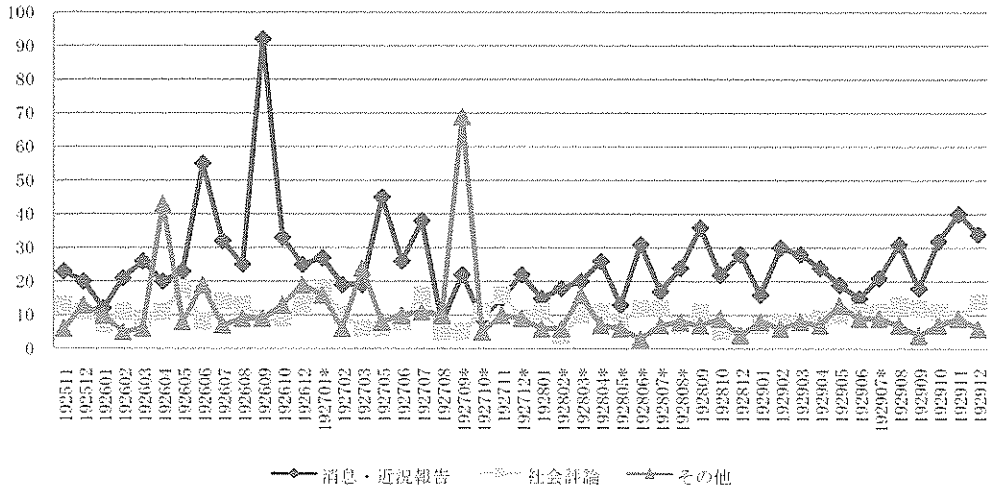


図1 記事分類ごとの各号掲載数（筆者による）

た。

(2) 記事の掲載構成

前掲の3コードを基にして、1920年代の『奄美』に掲載された記事内容を分類した。その結果が図1である。なお本稿では、各記事の分量ではなく、記事の個数によって数量把握を行った。3の(1)及び(2)において、『奄美』が単純な雑誌ではなく、新聞と雑誌の中間媒体であることを示した。この特徴は、掲載記事の特徴をみる前段としての記事分類を行う際に、記事一つひとつの分量に着目するだけでなく、記事個数への注目も促すものとなる。つまり、記事が何ページにわたり掲載されているのかだけでなく、各号にどのような記事がどれくらいの個数掲載されているのか、にも注目する必要がある。そのため本稿では、掲載記事の個数に着目したのである。

図1は、各号に掲載された記事を前掲コードにより分類し、その掲載数をコードごとにグラフ化したものである。「消息・近況報告」で1カ所(192609)突出しているが、これは「大阪特集号」のために大阪にて活躍している奄美出身者を多数掲載していたためである。また、「その他」のうち192709が突出しているが、これは1927年8月に昭和天皇が奄美大島に行幸した際の特集記事が多数掲載されたためである。これらを踏まえつつ、「消息・近況報告」が各号において多数掲載され

ていること、そして「社会評論」「その他」は大体同じ数掲載されていることを確認しておきたい。言い換えると、「消息・近況報告」が占める割合が高く、「社会評論」「その他」の構成は大体拮抗している。そして、「社会評論」「その他」は「消息・近況報告」に比して記事数は少ない傾向にあるが、それでもコンスタントに誌上に掲載されていることが分かる。

(3) 社会評論の具体

1で定義したように、社会評論は、執筆者の論じた内容とともに、執筆者が何を問題だと認識していたのか、にまで目配せを試みる概念である。本節の最後に、『奄美』誌上に掲載された社会評論の具体を、その例をあげることによって示しておくことにする。

(あ) 「神戸の各工場における郡同胞観」

これは192702に掲載されたもので、「在京陸軍三等主計正 山下兼道」が沖永良部島特産の百合の販路拡大を調査するために神戸を訪れた際、奄美出身者に見られる労働上の欠点を指摘されたことを記したものである。そこでは、4つの欠点を指摘されたといい、それは「忍耐力の足らぬこと」「目前のことにのみ走り、将来永久の希望なきこと」「他県人と親しまぬ弊あること(つまり同化しないと云ふ)」「言葉の通用を欠くこと(特に女子に多し)」の4つであったという。そして「以上の

他細部の点多々あるも、以上は郷里は勿論、郡一般の共通の欠点かと存候、要するに郷里出身者を歓迎する工場は至つて少く、以上の欠点を矯正するにあらざれば将来落伍者否な失業者を出すことになりはせんかと思はれ候」と記している。続けて、奄美出身者が多く勤務する「川崎造船所」「神戸製鉄所」などで奄美出身の「監督」が同じ奄美出身の労働者に勤務指導を行っていることを「喜はし」いことと評している。

ここからは、奄美出身の労働者に共通の欠点が存在することを認めていること、その欠点が神戸での労働に支障をきたしているという問題意識があり、それらを直さなければ最悪の場合失業しかねないことを喚起している。そして、その解決策の一つとして、同郷者同士による勤務態度の指導が期待されていることが読み取れる。

(い)「大島の農業を継承するものとその教育」

これは192512に掲載されたもので、「大島高等女学校教諭 武山宮定」が、奄美から若者が多数離村していた状況を鑑み、「家を飛び出す青年の心理」を解明するために記したものである。「生活といふものにウブな、そうして職業といふものに何らの見解を有しない」若者たちによる「家出は誠に然るべき事で、寧ろ勇敢な企図であり、美しい話である」と評す。若者たちが離村するのは、「田舎には娯楽がないからとか、田舎は美食が出きんから」ではなく、「都会から来るものすべての印象は美しく、田舎における総ては醜いといふ心持ち」を若者たちに抱かせたがためであり、「農業者は社会より卑下せられ識者より疎んぜられ、相手にしてくれる人が無いから、田舎臭を棄てねば人間らしくないといふ思想を青年が持った」ためだと指摘する。「斯くして田舎の青年男女はすべて田舎臭をすて、香水の香りを恋ふるものとなり」「偶々事情あつて行けない者は肩身の狭さに泣きつゝ、居残り者として又候(ママ)荒廃せる農村の青年よと一切の苦言を甘受せねばならなくなる」のだと評している。

ここからは、若者たちが離村することを問題として取り上げている。そして、その背景には若者たちに農村・農民を卑下する心持ちを抱かせてしまう奄美農村の現状があり、都会を美しいもの、田舎を美しくないものと若者に考えさせるような

状況に奄美の農村が追いやられていたという見方を窺うことができる。

5. 奄美研究と社会評論

本稿では、ひろく奄美を研究する際に『奄美』がどのような可能性を持つものか、という観点から『奄美』の特徴を浮かびあげておくことを目的とした。その際、社会評論概念を導入して『奄美』を位置づけることを試みた。最後に、これまで論じてきたことから言える『奄美』の特徴をまとめておくことにしたい。

1925年に創刊された『奄美』は、「新聞と雑誌の中間」を意識した媒体であり、奄美出身者の近況についての情報伝達、奄美の時事情報の提供、あるいは奄美が抱える問題等を議論することが、誌上で期待されていた。この創刊目的に着目したとき、『奄美』は刊行当時の奄美に関する情報を知る手掛かり、あるいは奄美から日本各地・世界各地へ移動していった人々の移動ルートを追う手掛かりを提供する可能性を秘めたものといえるだろう。記事内容を分類してみたとき、「消息・近況報告」に分類される記事の掲載が誌上の多くを占めていたことも、この可能性が決して低くないことを示唆するものである。

他方で、掲載記事をめぐって、奄美社・武山と読者・執筆者との間に何かしらのずれが生じていたことも同時に読み取ることとなった。奄美に限定されない記事の掲載は、奄美から日本あるいは世界各地に移動していった奄美出身者にとって、奄美だけではなくひろく社会全般を視野に入れつつあったことの表れと見るができるように思われる。社会評論が『奄美』誌上に、決して多数を占めていたわけではないもののコンスタントに掲載されていたことは、こうした表れを裏付けるものとしてみることができよう。

そして、社会評論がコンスタントに『奄美』誌上に掲載されていたことは、『奄美』に記事を執筆・投稿寄稿していた人々が、当時の社会に対する認識の有り様をどのような言説として反映させていたのかに迫ることを可能にする。社会評論には、執筆者を取り巻く社会状況や生活空間に対する認識とともに、いかににより良い状況を築き上げ

ていくべきかという方向性、換言すれば、専門家集団だけに限らない市井の人々がいかにより良い社会を築き上げるのか、その理想像が語られていた。これら理想像の語られ方を検討することを通じて、人々にとっての社会のありように迫る視座を得られるように思われる。

このように『奄美』には、『奄美』が刊行されていたころの奄美に関する情報を得るとともに、ひろく日本各地・世界各地に移動していった奄美出身者がどのような移動経路を経ているのか、あるいは掲載された社会評論を通じて当時の社会に対してどのような認識を持ち、どのような社会のあるべき姿を抱いていたのか、に迫る可能性が秘められているということができるのである。

本稿では、奄美研究への可能性の観点から、1920年代に絞り『奄美』の特徴を浮かびあげようとしてきた。今後の課題としては、1930年以降に年代を広げた場合の『奄美』の特徴を明らかにしていく必要がある。また、誌上に掲載された社会評論の具体がどのようなもので、どのような言説が展開されていたのかを検討していくことが求められる。

註

- 1) 例えば最近では、資料集として、松下史朗編『奄美史料集成』(2006年、南方新社)が刊行されている。
- 2) 中西雄二「奄美出身者と同郷者メディア—エスニック・メディア研究との関連で—」『人文論究』57巻4号、関西学院大学、2008年。
- 3) 本稿では、『奄美』が刊行された号数を年月で表記する。また、その年月表記は上4桁を西暦、下2桁を月とする6桁の数字で表す。
- 4) 武山は1886年、沖永良部島・和泊に生まれた。小学校教員を経た後に1920年から約8年にわたって鹿児島朝日新聞記者となった。奄美社創設時も記者として新聞社に籍を置いており、記者と社主の二足のわらじを履いていた。奄美社創設時、「とにかく私はこの雑誌で飯を食っていくのではないから雑誌の金は総べて雑誌の内容充実に使って、行かうといふ考へである」(192512「巻末に」)と記し、武山はあくまで新聞記者を本職と考えていた。その後、『奄美』の発行が順調に進んだこと、新聞記者と『奄美』編集との両立が難しくなったこと、そして「私は行々は小さくても自ら主宰するも

のをやってみたいとの考へも持つて居た」(192810「巻末に」)ことを理由に、武山は新聞社を退職し、奄美社経営に集中するようになった(『奄美名鑑』1953年、奄美社)。なお武山は、奄美社の経営に専従する傍らで、1928年には郷土雑誌『薩隅』を創刊し、あわせて薩隅社を設立した。192810には1928年9月13日付け鹿児島朝日新聞に掲載された『薩隅』創刊に関する記事が引用されている。これによると、「元来中央で発行する雑誌は余りにも都合讚美主義で地方農村の真生活には少しも触れず却つて地方純朴の俗風を破壊する傾きさへあり、(中略)かといつて地方雑誌は一部物好きが唯自己の多少の才能をたのみにその文章を活字にして楽しむ同人雑誌に非ざれば(中略)世道人心の作興とか産業経済の振興とか大局に眼を放つて信念的の事業として経営する」ことを目的に、武山は郷土雑誌の創刊を計画したという。

- 5) 例えば田島康弘は、喜界島から東京への移動について「戦前、とくに1920年代(大正末期から昭和初期)、母村の貧困さの中で多くの者が、小学校又は高等小学校卒業後、出郷した」と指摘している。田島康弘「奄美出身者の動向と東京における Segregation の形成—喜界島小野津の例を中心に」『鹿児島大学教育学部紀要 人文・社会科学編』vol. 41、鹿児島大学、1990年。
- 6) 当時、鹿児島県旧大島郡は現・大島郡(奄美地域)と、現・鹿児島郡十島村とが含まれていた。
- 7) 皆村武一『奄美近代経済社会論 黒砂糖と大島紬経済の展開』、晃洋書房、1988年。
- 8) 販売経路については不明であるが、一つの経路として奄美社から奄美出身者へと雑誌を送り、必要な場合は誌代を払い、不要ならば返送する方式をとっていた。定価は1冊25銭(192604より30銭)で、半年以上の定期購読者は誌上で居住地域と共に紹介された。この紹介によれば、奄美をはじめ、東京・大阪・神戸などの日本各地で、あるいは台湾・朝鮮・欧米等の地域で購読されていた。
- 9) 直接関係するわけではないが、武山は、『奄美』を創刊して1年後の192611「巻末に」で、「私は1年間の雑誌経営に於いて、新しい経験を得た、わが郡同胞には非常に本誌に共鳴してくれる方と、又余りに冷淡なる方と両極端あることを知つた」と記している。ここから、武山は少なくとも創刊当初は奄美出身者の大多数が『奄美』に協力的であるはずだと考えていたのではないかと推察される。

※なお、『奄美』からの引用文では、原文中の漢字を当用漢字に改めている。